

## こんな授業になるのかな？！（次期学習指導要領における授業）

「何ができるようになるか」

次期学習指導要領により、学びが変わる大きな柱だ。

既習の知識・技能を活用するため、「どのように学ぶか」が重要になる。

その学び方の一例として、「主体的に、対話的に、深く」学ぶことが示されている。

中学校理科においては、学習内容と授業時数に変化はなさそうなので、カリキュラム・マネジメントにより、他教科と関わりながら、いつ、どこで、このような学びを盛り込むか計画して行わなくてはならない。

ここで、一例を示す。

中学1～2年を横断した「物質」の事例です。既習として、物質の性質に、色、硬さ、密度、電気抵抗、酸との反応、炎色反応、酸素と結びつく質量比 など多くの知識や経験を持っている。

通常、授業では、これらの知識を独立して学習するが、総合的に使って、実験も交えながら、主体的に対話的に、深く学ぶのはいかがでしょうか。

問 スチールウール（鉄）、細い銅線、ニクロム線、真鍮、マグネシウムリボン がある。

これらを今まで学習した知識と実験に基づいたデータや観察結果で判断し、物質名を特定せよ。

指導としては、個人で見通しを持たせる。個人差があってもよい。ある生徒は実験方法まで計画するだろう。次に、発表する。様々な方法が出るし、同じ物質でもちがった特定方法もあるだろう。

どちらの方がわかりやすく、安全で、シンプルな方法か短時間の議論をさせる。

そして、実験を行う。

データの共有だが、例えば「A」という物質の黒板のスペースにはには、様々な方法によるデータが出てくることになる。その結果を基に短時間だが学級全体で判断するとよい。

成果としては、

- ・様々な方法を思い出し、定着を図ることができる。（学んだことを生かす）
- ・たくさんある方法から、自分の方法で問題解決を図ることができる可能性がある。（自信）
- ・科学を総合的に考えることができるようになる。（何ができるようになるか）

2年生の秋頃か、3年生の受験勉強の頃に実践するのがいいのではないだろうか。

カリキュラム・マネジメントが重要になる。

繰り返すが、「主体的に、対話的に、深く」学ぶことの指導が、「～先生にしかできない、特殊な指導法」になってはいけないのである。